
青い瞳に愛を囁く

Nerine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い瞳に愛を囁く

【コード】

N0982BA

【作者名】

Nerine

【あらすじ】

突然、愛する婚約者の失踪を告げられた男は、必死に彼女を探して日々奔走する。その姿を見つめるのは、彼が搜索の途中で拾った一匹の猫だった。実はその猫が、彼の探す婚約者で婚約者を溺愛する男と、猫を愛する女との壮絶なバトルが今ここに幕を開ける！？

そこそこ豪華で大きく、しかしその立場からすれば質素な屋敷の一室。

主の寝室のベッドの上には、大きな山とその5分の1にも満たない小さな山が2つ、動く事無く並んでいる。

しかし、夜行性の鳥の鳴き声だけが響く静かな夜の濃さが頂点に達して直ぐ後だった。

小さな山がもぞもぞと上質な夜具の端へと移動し始め、ゆっくりと正体を現す。

月明かりに照らされたそれは、大きな欠伸の後に伸びをして、丁寧に毛繕いを始めた。

クリームタビーの流れるような美しい長毛で、気高い印象を与えるブルーの瞳。すらりとした四肢の麗しい猫である。

彼女は、つい1週間程前に、大きな山の正体でもあるこの屋敷の主に拾われた猫だった。

その時の彼女は、全身が泥に塗れて雨に濡れており、屋敷の使用人たちは塵を持ち帰って来たと勘違いをして、とうとう主人が壊れてしまったとかなり焦っていたのだが、猫を拾ったと告げられ丁寧に洗ってやったところ、その美しさに全員が思わず感嘆したものだ。主は別段猫好きなわけでは無く、彼女を腕に抱いたのはどちらかと言えば褒められない感情からだった。

彼は、侯爵として屋敷を持ち国を動かす側の貴族で、両親の不幸により若くしてその地位を継ぐこととなり、最近の噂の中心に立つ者でもある。

しかし、そのストレスから彼女を捨ったわけでは無い。彼には、婚約者が居た。

田舎の領主の親を持ち、一応貴族の娘。2人はお互いを愛し、とても穏やかにそれを育んでいたのだが、貴族といえども両者には大きな差があり、さらに彼の容姿が良すぎた為に周囲の障害が娘の方にだけ辛いものを強要させる。

そして10日程前、彼の屋敷に訪れようとしていたはずの娘が失踪したとの連絡が彼に届く。

その日からずっと、彼は娘を探して毎日体と精神を酷使し続けていた。

寝る間も惜しんでの必死な姿は、使用人たちの心を痛ませ、さらに娘の事も好いていた彼等はその身を案じて祈る。

残念ながら、今も娘の情報はまったくといっていい程手に入れてないのだが、そんな日々の中で出会ったのが美しい一匹の猫だ。娘は大の猫好きで、彼に対して常にその可愛らしさを語る程の陶酔ぶり。

彼はきつと、諦めたくないのだろう。これを好機にと、彼の気持ちを考えずにこぞつて寄ってくる貴族の娘や、紹介してくる親。言葉でいくら叫んだところで、その者達に彼の想いは二の次にされてしまう。

だったらと、彼は偶然見つけた死にかけの猫を拾った。婚約者の娘を忘れるつもりは無いのだ、と。

その気持ちを重々理解している使用人達は、進んで彼女が暮らす

のに必要なものを集め、そして1週間前から彼に寄りそう娘の代わりとなったのだ。

彼女の効果は絶大であった。彼はきつと、希望をさらに強くしたのでろう。捜索の手は一切緩めないが、それでも睡眠と食事だけはしっかりと取るようになった。

ただ、彼自身はそう猫に興味は無く、眺めはすれども可愛がろうとはしない。

彼は、あくまで猫について熱く語る娘の姿が好きだっただけで、猫そのものが好きなわけでは無かった。

丹念な毛繕いが終わった彼女は、もう一度欠伸をした後、窓から見える月を眺めてからベッドの上へと軽やかに跳ぶ。

しかし、寝るつもりは無いようで、何故か大きな山になっている彼の顔を隠す夜具を、一生懸命可愛らしい丸い前足でどけようと始めた。

起きるにはまだまだ早い時間。深い眠りの邪魔をされ、冷気に不快感を感じた彼は、彼女の足の動きに合わせてるように身じろぎをする。

それでも止めない彼女は、とうとう彼の顔を月明かりに照らすことに成功した。

さらりとシーツを撫でる青い髪。瞳を閉じているので色は分からないが、縁取る睫は男にしておくには勿体無い程に長い。

さしずめ、神に愛された申し子というところか。甘さを与えるような美しい造りがそこにはあった。

そんな彼の寝顔を、彼女は猫らしからぬ表情で静かに見つめて、鼻先を彼の額にそっと寄せた。

『……ここに、いるよ』

部屋に響いた声。勿論、猫の鳴き声だったのだが、囁くようなそれは、彼女の言葉として伝えるのであればそう言っていた。彼の探す婚約者の娘は彼女だった。

『走り回っても、見つけれないよ』

彼女は、2人の関係を妬み、嫉妬したとある貴族の娘の手により、猫に変えられてしまっていたのだ。

自分が彼の隣に居るのには不釣り合いで、祝福されない事は十分に分かっていた。それでも共に寄り添いたいと想ったのだから、嫌がらせや中傷など、彼女は正直どうでもいい。

しかし、彼の休暇に合わせて過ごす一時の為に屋敷を訪れようとしていた道すがら、待ち伏せをしていた貴族の娘の手の者にこのよくな呪いを施されようなどとさすがに予想外であった。

それからの数日は、とにかく生きるのに必死で、彼女はあまり覚えていない。

ただ、最早これまでと諦めかけた時、彼女を抱き上げてくれた温もりが誰よりも大切な彼だったのだけは分かった。

偶然か奇跡か、はたまた運命か。とにかく、自分が猫になっても彼は探し出してくれたのだと、泣きたい程に感動した。

この呪いは、関係を引き裂くものであると同時に、打ち碎けば誰も邪魔が出来なくなるほどに絆を深くする試練にもなる。

恋人であった2人だ。呪いをかけた魔術師は、解く条件を猫が娘だと気付いた上での甘い口付けに定めている。

猫好きであっても、目の前の猫が本当は人間で恋人だなど、気が触れない限り想像できないだろう。当然、彼女もただ待っているわ

けではない。

この1週間、色々ヒントを出そうと必死になってはいるのだが、如何せん猫だ。ペンを持つとうにも無理があり、纏わりつこうと思っても、彼女を探して寝る以外のほとんどを外で過ごす彼は相手にしてくれない。

『私、猫になつたんだよ』

切ない訴えはか細い鳴き声に変わり、彼の眠りの妨げにしかならなかった。

耳もヒゲも下がり、項垂れた可愛そうな猫。月明かりに照らされて、誰にも慰めてもらえない可哀想な娘。

気付いて、と訴える姿は本当に儂かった。

「……ハバナリア？」

そこでふと、寝返りを打ち彼女と向き合う形になった彼が、うっすらと瞳を開ける。

隠されていた瞳は、髪と良く合い優しさに満ちた薄い青だった。

『アイ、リス？』

掠れた声、縋るような声。一方通行な言葉は、まどろみから抜け出せない彼に幻を視せる。

金の波打つ髪に、彼と似た薄い青の瞳。弱い甘えを嫌い、力強さを宿した光。小柄な体は、心の軽快さを生まれながらに宿している。

「リア」

見つけた、と囁きながら浮かべた満面の笑みに囚われてしまった

彼女は、近付いてくる彼の顔に固まっただけで対応出来なかった。

彼が寝ぼけているのは明白で、それでも同じ色の瞳が猫と彼女を結びつけてしまったのだろう。

『ふみや！？』

鳴き声と意味が一致するというおもしろい現象と共に、猫の体は気の抜けるような音を出しながら煙に包まれる。

「あ……戻っ、た？」

そして、煙が晴れると、美しい猫が居た場所には象牙色の肌に金の髪が良く合う、小柄で可愛い女性が。

彼女は半ば呆然と自分の掌を眺め、一糸纏わぬ姿で彼へと視線を移す。

「アイリス」

震える指先、潤む薄い青の瞳。伸ばした手は彼の肌に触れ、温かい優しさを伝えてくる。

感激に胸を震わせ、言葉が出ないかに思われた彼女だったのだが、その動作を終えればぐつと拳を握り、確かな足取りでベッドからクロークへと移動し始めた。

何故彼を起こして、喜びを分かち合わないのか。とても不思議だったのだが、適当に彼の服を着始めた彼女の瞳には、どうしてか隠せない程の怒りが燃えている。

当然、戻った瞬間、彼女はもう彼に心配をかけずに済むと安堵したのだが、女性は動揺に強い生き物だ。冷静にこの1週間の生活を思い出した結果、彼女に湧いたのは安堵以上の怒りだった。

そのまま寝室を飛び出した彼女。
屋敷全体が寝静まっております。薄暗い中、彼女の足は迷う事無くしつかりと目的を持って動いていく。

「え……？」

辿り着いたのは、夜勤の警備の者の為の休憩室だった。

その時は2人がそこで寛いでおり、大きな音で開かれた扉に一瞬警戒した彼等だったが、現れた人物を見て驚きに声も出せない様子。

2人で顔を見合わせ、彼女に戻し、再び顔を見合わせた彼等は、やつのことで声を出すことが叶う。

「ハベナリア様！？」

「ヴィーナ嬢！？」

この際、2人の呼び方がバラバラなのは置いておこう。1人は彼女を数回しか見た事が無い新人で、もう1人はかなりの顔見知りだからとだけしておく。

驚きに現状把握が出来かねる彼等に苛々と、冷静になるまで待たず、彼女は両手拳を握って鋭い瞳を2人に向ける。

ひつと情け無い声を出す新人と、嫌な予感を抱く知人。大きく息を吸い込んだ彼女は、説明は後だと言葉にせずに気付かせる程怒っていた。

「今すぐセルヴィスを叩き起こして！そしてギルを連れて来なさいって伝えてくること！」

「は、はい！」

セルヴィスとは、主の補佐をしている者で、もう1人は侯爵家お

抱えの魔術師だ。

一体何故、そもそも今までどこでどうしていたのだ、という疑問は勿論ある。しかし2人とも、それを聞いた瞬間自分の命は無いかもしれない、と思うぐらい彼女の気迫に押されており、新人の警備兵は有無を言わせないその命令に、敬礼で答えて素早い動きで部屋から出て行った。

「グイ、グイーナ嬢……？」

「ふふふ、アイリスの奴、目に物見せてやるんだから」

友人は知っていた。一見可憐でおしとやかに見える容姿をしている彼女は、その実とても男らしい性格をしていて、譲れないものは何があっても守り抜く強さのある情熱的な女性であることを。

そして何より、大の猫馬鹿だ。自身が持つ柔軟な思考や、ハンターのように強かな一面、軽快な身のこなし等から猫の瞳とある人々に呼称されたりしているのだが、とにかく猫馬鹿だ。

「もしかして、拾ってきた、あの猫って……」

最近住人になった猫の存在を知らない者は、この屋敷には居ない。あの猫は、少なからず主人の力になっていた。しかし、その反面、主人が猫から彼女の想いをさらに強くさせただけで、それ自体には興味を持たずにまったくと言っていいほど世話をしたり、可愛がったりしていなかったこともだ。

「ええ、馬鹿な小娘のお陰でね！ でも、そんなことよりも」

これは最悪だ。友人は、思わず頭を抱えながら心の中でそう叫んだ。

廊下からは、バタバタと慌てる足音が3つ聞こえる。

「アイリスに何としても、猫の愛らしさや素晴らしさを伝えてやるんだから！」

彼等にも、その力強く波乱を含んだ意気込みはしっかりと届いていた。

こうして、猫の瞳と婚約者を溺愛するマイペースな男の激しく可笑しい戦いは幕を開ける。

勿論、心底その身を案じて心配していた彼に彼女の無事を伝えて安心感を与えてから。

周りを巻き込んだこの騒動は、後にかなり脚色されつつもこの国で一番有名な童話になるのだが、それは余談としておこう。

(後書き)

読んで頂きありがとうございます。

どうやってその情熱を彼に伝えるのかは、お抱え魔術師を呼んでい
る時点で察してやってください。

作者がそもそも大の猫好きなので、書いていて楽しかった(笑)

よければ、ご意見ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0982ba/>

青い瞳に愛を囁く

2012年1月2日10時49分発行